

## 第59回中学生作文コンクール

都道府県別賞一等

普通の生活が続けるために

群馬県 伊勢崎市立第二中学校 一学年

栗原 治豊

去年の秋だった。その日の午後、僕は、体育館で体育の授業を受けていた。そこに、突然、教頭先生が入ってきた。そして、僕を見つけると、こう言った。「すぐに帰る用意をして、職員室に来て下さい。」

僕は、驚いたけど理由が分からず、とにかく急いで教室に戻った。一人で帰る用意をしている間、何があったのだろうか、ずっと不安な気持ちだった。

職員室へ行くと、教頭先生が真剣な顔で待っていた。そして僕に言った。

「落ち着いて聞いてください。お母さんが倒れて、病院に搬送されたようです。」それを聞いて、頭の中が真っ白になった。今朝も元気に見送ってくれた母が、倒れたなんて信じられなかった。しばらくすると、父が学校に迎えに来た。父は不安そうな顔で僕に言った。

「お母さんは、運転中に急に苦しくなって、救急車を呼んだみたいだ。」それを聞いて、不安な気持ちが大きくなった。どうか無事でいて欲しいと思った。病院には、姉や親戚も来ていた。母はまだ治療室にいて、待合室の空気が重苦しかった。

しばらくして、母が治療室から運ばれてきた。母は、僕を見ると、優しい笑顔を見せてくれた。それを見て安心した。その後、医者の説明と一緒に聞いた。「心臓の近くの大動脈が切れていました。でも、血管の内側が切れただけなので、血液が漏れていませんでした。もし外側も切れていたら危険な状況でした。」それを聞き、怖くなり体が震えた。母はそのまま二週間入院した。

その後の検診で、大動脈の傷はふさがり、手術しなくても生活できると言われた。でも、手術をしておけば、再発の可能性は少なくなるらしい。手術の内容は、大動脈の中に人工血管を入れるという大変な手術だった。母がそんな手術を受けると思うと怖くなった。でも逆に、手術せず、再発を心配して生活することを考えたら不安にもなった。家族で相談して、手術することになった。

その翌週に、母は手術を受け、成功した。僕はとても安心した。でも、手術代や入院費のことが心配になった。難しい手術なうえ入院期間も長かったから。父に聞くと、想像よりとても高額だった。そんなに払って家族の生活は大丈夫なのかと心配になった。

父は、僕がそんな心配をしていると気付いたのか、父の方から教えてくれた。「生命保険に入っているから大丈夫だよ。」

## 第59回中学生作文コンクール

この時、僕は生命保険のことを知らなかった。母の生命保険は、亡くなった時に支払われるだけではなく、手術代や入院費も保障してくれるものだった。それまで僕は、生命保険には必要な人が入ればいいと思っていた。でも今回、母が、突然、入院が必要な状態になって、リスクは誰にでもあるのだと思った。生命保険は誰にとっても必要だと思った。もし母が生命保険に入っていなかったら手術を受けることはできなかったかもしれない。そして、今までどおりの生活には戻れなかったかもしれない。

母の退院の日。その日は偶然にも僕の誕生日だった。父と姉と三人で母を迎えに病院へ行った。そしてその帰り道、ケーキ屋に寄って、注文した誕生日ケーキを受け取った。家族が誕生日を祝ってくれることも嬉しかったけど、それよりも僕は、母が無事に手術を終えて、今までどおりの、普通の生活に戻ることに嬉しかった。

家族と普通の生活が続けること。それが僕にとって一番大切なことであって、それを妨げるリスクへ備えるため、生命保険は絶対に必要なものだった。